



キリンがレインフォレスト・アライアンス認証取得を支援しているスリランカのクレイグヘッド農園

キリン

「キリンビール」をはじめ、「キリン 午後の紅茶」や「キリン 生茶」「シャトー・メルシャン」などでおなじみの総合飲料メーカー・キリン株式会社。同社は、2050年に向けた「キリングループ長期環境ビジョン」を掲げる、日本有数の環境先進企業です。また、同社には、地球環境基金事業の1つである「全国ユース環境ネットワーク促進事業」を支援いただいています。

※「全国ユース環境ネットワーク促進事業」の詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/youth/>



共通価値の創造を目指し 環境課題に取り組み

キリングループは社会的課題の解決と企業の成長の両立を追求するためにCoSA (Creating Shared Value / 共通価値の創造) を経営戦略の中核に据えています。中でも環境はすべての課題の土台という認識の下、2013年に「キリングループ長期環境ビジョン」を策定。これは、50年までに資源循環100%社会の実現を目指すという意欲的な取り組みです。具体的には、キリンの事業にとって大切な原料である「水資源」と「生物資源」、製品化に必要な「容器包装」、そしてそれらすべてに影響を与える「地球温暖化」への対応という4つを重点テーマとして掲げています。

例えば「生物資源」の持続可能な利用では、「キリン 午後の紅茶」の茶葉主要生産地・スリランカで、紅茶農園が持続可能な農法認証制度「レインフォレスト・アライアンス認証」を取得するための支援を実施。13年からの3年間で70農園がトレーニングを行い、

環境保全の次代の担い手である若者に 学びや発信の場を提供

30農園が認証を取得しました。また、「容器包装」では、リターナブルビールの軽量化に取り組み、大瓶に続いて国内最軽量中瓶を開発しています。

発信を重視する「キリン・スクール・チャレンジ」

多岐にわたる取り組みの中から、未来の環境保全の担い手であるユースへの支援について、同社の執行役員・林田昌也さんにお話を伺いました。

「中高生向けのプログラムに『キリン・スクール・チャレンジ』があります。これは環境NGO『こども国連環境会議推進協会(JUNEC)』との協働プログラムで、午前中に二つの講座、午後からは講義を受けてのワークショップを開催。ワークショップでは、アウトプットとしてポスターを作ったり、作品を写真撮影してインスタグラムに上げ、発信しています。発信を重視するのは、単に「良い話を聞いたね」で終わりにたくないからです。作品を作る中で、



「キリン・スクール・チャレンジ」のワークショップの様子(右)、インスタグラムにアップした作品(左)

環境と自身の関わりを見つめてほしい。私たちは、彼ら・彼女らが家庭や学校、地域に帰ったとき、周囲に影響を与えるインフルエンサーとして活動してくれることを期待しています」

「全国ユース環境ネットワーク 促進事業」への期待

キリンは「全国ユース環境ネットワーク促進事業」を支援し、全国大会への協賛とともに、高校生の会社訪問を受け入れています。その意義について林田さんは、こう話します。

「次代を担う高校生が環境をはじめとする社会的課題を理解するため、あるいは自ら行動を起こせるよう、いろいろな機会を提供することは極めて有用です。また、参加意欲を



キリンの基盤技術研究所を訪れた横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校の生徒たち

高めるアワードという形式も分かりやすいので、引き続き協力させていただきたいと思っています。

今後は、北海道と東京の高校生、高校生と地元農家というように、地域や立場が異なる人が知り合い、交流できる場が増えるといいですね。例えば、地域という単位で環境を考えれば、市民や企業など他者との協働が必要になるし、環境だけでなく地域の活性化など別の課題も見えてくるでしょう。簡単ではありませんが、若い人たちがより広い視野で環境を捉え、活動に取り組めるよう工夫していただければと考えます」



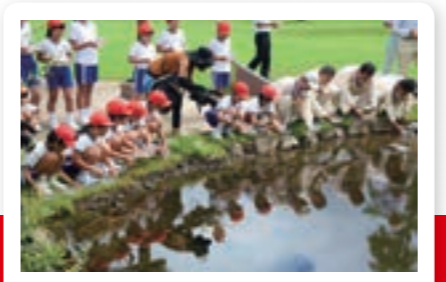
企業14社と大学生50名が交流した「サステナブルカフェ」。2016年10月23日キリン本社で開催



小学生以上を対象に、キリン横浜工場のビオトープで毎週日曜日に開催している「自然の恵みを感じるツアー」



50年以上、ホップの契約栽培が行われている遠野市で開催した「遠野ホップ畑生きもの観察会」



天然記念物アユモドキの人工繁殖に協力した地元の小学生が岡山工場のビオトープで放流



「キリンライブラリー」10周年セレモニーを午後の紅茶用茶葉をつくっているキャンディで開催



スリランカの小学校に年100冊程度の図書を寄贈する「キリンライブラリー」は2007年にスタート

お話を伺った 林田昌也さん

キリン株式会社 執行役員 CSV本部 CSV推進部長

「午後の紅茶のメインユーザーは10代の男女。でも彼ら・彼女らは、日本の紅茶の約6割がスリランカからの輸入で、

アンズ認証を取り上げた意図はどこにあるのでしょうか。」

「次代を担う高校生が環境をはじめとする社会的課題を理解するため、あるいは自ら行動を起こせるよう、いろいろな機会を提供することは極めて有用です。また、参加意欲を

*写真提供:キリン株式会社